ふるさとわがまちづくり

富田自治区

◆「富田」のむかし

富田町は、幕末の元治・慶応から明治初年にかけて、瀬戸街道沿いのまちとして栄えました。この街道は飯田街道の中金から芳友・小峯・国附・富田を通り、藤岡地区の御作から飯野を経て瀬戸へ通じていました。国附と富田間の矢作川は船で往き来していましたし、富田には行商宿もあったと聞いています。

富田町には智誓寺という古い寺がありますが、この檀家の多くは瀬戸街道沿いにあるといいます。この辺りからかつて出荷された木炭やワリ木なども、この街道を運ばれました。こうしたことからも、経済的にこの街道が、大きな繁栄をもたらしたということはないにしても、生活道路として住民の日常生活に大きな影響を与えたことは確かなようです。

また、明治３９年まで富田は富貴下村、国附は石下瀬村と聞いています。この２つの町が行政的に統一されたのは昭和３０年の猿投町創立のときです。この地区から町会議員を選出しなくてはという機運が盛り上がり、両町が手をたずさえなくてはならなかったのが行政区統一の発端だと聞きます。

また、以前は矢作川で豊富に取れた鮎を出荷する中和出荷組合も作られ、現金収入を求める唯一の道とあって国附町とは特に関わりが深かったようです。

◆「富田」の地形

富田町は、新緑がとてもきれいです。しかし、地形的には決して良い条件とはいえません。自治区の南側を矢作川が流れ、山が矢作川の近くまで迫っているため、余裕のある土地はほとんどなく、新しく家を建てることが難しいです。

♪富田焼き餅、大河原ダンゴ、藤沢朝から麦粉菓子とか♪椀子山から富田を見れば、ばくろう（馬喰）馬かよ鞍（蔵）がない・・・という古い歌も、現在では想像もつかないものになってしまいました。矢作川の両岸には素晴らしい家々が建ち並んでいるからです。

まず、矢作川の清流を取り戻し、山紫水明の地として健全なレクリエーションの地としたいと考えています。

◆渡し船と富国橋

富田・国附を結ぶ渡し船は、昭和２７年頃まで続き、昭和２９年にワイヤーによる吊り橋ができ、その橋も伊勢湾台風襲来により押し流されてしまいました。

昭和３６年に鉄筋コンクリートの橋ができ、４０年間利用されていましたが、平成１２年９月１２日東海豪雨により中央部が流失してしまいました。

新富国橋を平成１５年より平成２１年度の完成に向けて、工事着工をしました。新富国橋は、山間にあり、交通の利便性を図ると共に自然との調和も配慮されています。緑と橋が一体となり、矢作川を見渡すと、川魚や水鳥などに出会え、自然と人が共存していることを実感することができます。

富田自治区データ
（H20.４現在）

世帯数：２３世帯
　　：２１世帯（昭和５２年）
組数：２組
面積：０．８４１Ｋ㎡
回覧：月2回
防犯灯設置箇所：１０箇所
小学校：東広瀬小学校区
自治区会館：富田町公民館